授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 1878 号

Usefulness of the neutrophil/lymphocyte ratio measured preoperatively as a predictor of peritoneal metastasis in patients with advanced gastric cancer

（進行胃癌患者における腹膜転移予測因子としての術前測定の好中球数/リンパ球数比の有用性の検討）

中山　雄介（なかやま　ゆうすけ）

博士（医学）

論文内容の要旨

腹膜転移を有する胃癌の予後は不良である．時に，治癒切除を企図して手術を開始した際に，術前には診断できなかった腹膜転移が発見されることもある．ゆえに腹膜転移の正確な診断が治療法の選択にとって重要である．近年，好中球数/リンパ球数比（neutrophil/lymphocyte ratio：NLR）や C 反応性タンパク値（C-reactive protein：CRP）といった，簡便に測定できる全身性の炎症を反映する検査項目値が胃癌の進行の予測因子になるとの報告が多く認められる．われわれは今回，NLR や他の臨床検査項目値が，胃癌の腹膜転移を術前に予測することが可能であるのかを評価した．

方法としては，2008 年 6 月から 2011 年 12 月までに手術を行った 359 例の胃癌患者を対象に，術前の静脈血採血の結果を用いて，腹膜転移の有無と各臨床検査項目値との関連を評価した．

結果は，単変量解析では，NLR >2.37 と血清アルブミン値 <3.5 と活性化部分トロンボプラスチン時間の延長，術前の腫瘍壁深達度が周囲臓器に及んでいるもの（cT4）は腹膜転移の有無と有意に関連が認められた．さらに多変量解析を行ったところ，NLR >2.37 と cT4 はそれぞれ独立した腹膜転移の予測因子であった。

この結果から，NLR は胃癌腹膜転移の予測因子となりうる可能性が示された。NLR は，術前に簡便に測定できる検査項目値であり，今後の胃癌腹膜転移の診断の一助になる可能性が考えられた．